

---

# 東方真不死鳥伝

るーか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方真不死鳥伝

### 【Nコード】

N1905Z

### 【作者名】

るーか

### 【あらすじ】

青年は出会う。

自分の運命を変える少女と

この小説はオリ主、最強系、原作崩壊など色々な要素が含まれます。  
それが嫌な方はブラウザバックをお願いします。

## 代零話 昔話（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

## 代零話 昔話

昔々ある所に何の変哲も無い村がありました。

その村から少し離れた所に、不知火灰しごいと言う青年が住んでいました。

齡は十九前後と言ったところでしょうか、その青年の髪は黒、目は朱あかと言った、少し変わった青年が住んでいました。

不知火はある能力ちからを持っていました。

そのため、村から離れた場所に住み、村に襲ってくる妖怪を倒していました。

彼が村人に対するせめてもの償いでした。

彼が生まれる時に彼の母親は体の中から炎が吹き出し、見るも無残に燃え尽きました。

その母親が燃えた灰の上に不知火灰は傷一つ無い様子で座っていました。

母親を殺した我が子を殺そうと父親は幼い不知火の首を絞めて殺そうとしました。

ですがまた、父親も母親と同じように燃え尽きてしまったのです。

その様子を見ていた祖母は恐怖し、『化け物だ』と村中に伝えました。

そして祖母の話を聞いた村人は不知火灰を殺そうとしました。ですがやはり、父親と母親と同じように燃え尽きてしまいました。

そんな時一人の術者が村を訪れました。

其の人物はセイメイと名乗りました。

セイメイは村人に頼まれ、不知火を見に行きました。

不知火の家に入ったセイメイは絶句しました。

赤子一人だけ置いて家には誰もいず、それに加えて床には大量の灰が在ったからです。

そしてその赤子は一人で灰で遊んでいました。

固まっていたセイメイですが、その赤子の内包する霊力を視て先ほどよりも絶句しました。

術者の中でかなりの霊力を持っていたセイメイですらその赤子の一割にも見たなかったからです。

セイメイは慌てて、封印術をかけました。

ですが、セイメイは封印術をかけ終わり、へたり込んでしまいました。

赤子の力を封印するだけで、セイメイは自分の持っている霊力全て捧げてしまったからです。

そしてその赤子はセイメイの方へと這って着ました。

嬉しそうに、楽しそうに笑いながら。

其の姿を見てセイメイは思いました。

私が育てようと。

そう決心したセイメイは直ぐに村人に赤子と私は住むと言って、村はずれにある古びた小屋を借り、赤子に灰と名をつけ二人で暮らし始めました。

十年後

セイメイが死にました。

過労だったのです。

いつも一人で妖怪退治をし、家事をし、村人の治療をし、働きすぎでした。

セイメイが死んでからが大変でした。

セイメイがいた頃ならまだ、灰は普通の子のように接しられていましたが、セイメイが死んだら、直ぐに『化け物』と呼ばれました。

そして、石を投げられました、足で蹴られました、家を荒らされました。

ですが耐えました、自分のやった罪を知っているからです。

それから彼は体を鍛え始めました、村の人たちを護るために、自分がやった罪は赦されないけれど、それでも償いたいから。

そうして何年か過ぎ、灰は十九になりました。

妖怪と戦い続けている彼は出会いました。

これから彼の運命を変えるであろう少女に

代零話 昔話（後書き）

真不死鳥伝どうでしょうか。  
零はガラッと変えて見ました。

どうぞこれからもよろしく願います。

感想、誤字等ありましたらどんどんください。



## 代巻話 始まりの日（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

## 代巻話 始まりの日

リンリンと鈴の音が灰の頭に響いた。

その鈴の音はセイメイが残した結界であった。  
結界は村全体を覆っており、その中に妖怪、神などが入ると知らせる感知用結界であった。

「さて、いくか・・・」

オレは赤い和服の上に黒い羽織を羽織って結界が示した場所にゆつくりと行った。

反応は弱い、相手は雑魚と考えてまず相違ないだろう。

そう思い、今日の昼飯の献立を考えていると反応が在った場所になっていたようだった。

「こいつは・・・」

其処にいたのは、まだ幼く見える少女であった。

驚いたのは其処ではない、その少女は妖怪ではなく神の一種であったからであった。

尚且つその神は消えかかっているようであった。

「おい、其処に倒れている神様。」

反応がないな・・・

全く、何だって言うんだよ。

雑魚妖怪だと思っ  
て着て見れば消えかけている神様だしよ。

はあと一つため息を漏らすと灰はその神様を背負った。

「はあ・・・はあ・・・」

私はもう駄目なんでしょうか・・・

まだまだ、やり残した事は沢山あると言うのに。

私と言う地蔵が人々に忘れられて何年でしょう・・・

最後に来てくれたのは、あのセイメイと言う女性でしたね。  
懐かしいです。

それに、セイメイには息子がいるみたいでしたね。

私に手を合わせて息子の幸せを願うんですから・・・

「もう・・・駄目・・・ですね・・・」

限界だった。

忘れ去られた幻想は、消え行くのみである。

もつと後の時代ならば、受け皿の土地があるかも知れないが、今はまだ無い。

何故なら、世界には幻想が溢れているからだ。

そこらには妖怪がいるし、ヒトの中でも特異な才能を持った者もいる。

そんな世界に忘れ去られたモノの受け皿があるのだろうか。

答えは否だった。

取り合えず、布団で寝かせたわけだが、どうすればいいんだろうか。  
相手は神で消えかかっている。

・・・わかん。

「こんなとき、セイメイがいればな・・・」

いない者を思っても仕方が無い。  
そう割り切ると灰は寝かせている部屋に向かった。

ガラスと戸を開けると布団の中で寝ていた神様は起き上がっていた。  
先ほどよりも顔色は回復した様だったが、まだまだ本調子とは呼べ  
なさそうであった。

「目、覚めたのか。」

「はい。これは貴方が？」

「まあな、さすがに倒れてる女の子は見捨てる事は無理だって、た  
とえそれが神様でもな。」

「な!？」

少女は心底驚いたような表情をしたが、直ぐに冷静な表情に戻った。

「そう・・・ですか。有難うございました。見ず知らずの私を助けていただいて。」

「いやいや、気にしないでくれよ、オレの自己満足だしさ。」

「そんなわけには行きません!恩を受けたならば恩で返さなければ!」

「そ、そうか・・・」

少女の激しい剣幕に少々たじろいってしまった灰だった。

「まあ、家には何日でもいていいからな。」

「いえ、迷惑になりますから、直ぐにでも・・・ッ」

少女はそう言っただけで立ちあがろうとしたが、やはり回復していないのか、体が思うように動いてなかった。

這ってでも出て行きそうな雰囲気を感じた灰は即座に切り出した。

「いてくれた方が助かるんだ、最近誰とも話して無くてさ。話し相手はほしかったんだよ。」

「本当に良いのですか？」

「こっちからお願いするよ、オレは灰だ。苗字はまだ決めてない。」

「私は四季映姫です。これからお世話になります。」

「映姫か、これからよろしく。」

「よろしく願います灰。」

「じゃあ、なんか用があったら言ってくれ。それと風呂が沸いてるから入ってくれ。」

風呂場はここを右に曲がった直ぐにあるからなと灰はそう残して映姫がいる部屋を出て行った。

「不思議な人ですね。」

そしてどこことなくセイメイに似ている気がしますね。

## 代巻話 始まりの日（後書き）

無印と真の違う点を紹介します。

灰の弱体化があります。

具体的なのは本編で。

映姫と一緒に旅に、育ての親がセイメイと言う女性と言うところですね。

後は、そうですね、まだきまってない感じですね。

感想有難うございました。

DKさん

零話は過去話でしたので童話風に見えました。

心情の描写ですか、頑張って増やそうと思ってるんですが、やはり説明文の方が多くなってしまいますね、頑張ります！  
応援よろしく願います！

ではまた次回

感想など待ってます。

## 代式話 夏、燃える太陽（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。



## 代式話 夏、燃える太陽

映姫と出会ってから季節は流れ今は夏である。

それも今年はいつもよりも暑い、そのためオレは夏でも羽織っていた羽織を脱ぐ羽目になったんだ。

「全く、暑い暑すぎる……」

「灰はそればかりですね。全く。」

映姫はそう言いながら汗一つ掻かずに部屋の掃除をしている。縁側で死んだように横になっているオレとは全く違うな。

「だって暑いもんは暑いだろうよ。映姫は暑くないのか？」

「私ですか、私は暑くないですね。」

「へえ、なんか秘訣とかあるのか？」

「そうですね。」

そう言うとき映姫は掃除の手を止めて少し考えているようだった。

「ん……暑いと思わなければ暑くないんですよ。」

「なんて根性論……」

むちゃくちゃだな。と思いながらオレは立ち上がった。

「あれ、灰どこかにいくんですか？」

「ああ、ちよつとな。暑さ対策にでもつてね。」

オレはそのまま家を後にした。

「灰は行ってしまいましたね。」

それにしても暑い。

灰には暑いと思わなければと言いましたが、本当は暑いです。

「お風呂にでも入りましょうか。」

顔は全く汗を掻いていなくとも服のしたは汗でぐっしょりと濡れていた。

暑い暑いと言いなが映姫は風呂場へと向かっていった。

「灰が作ったこのお風呂は本当に凄いですね。」

この時代風呂と行った物は無く、体を拭くか湯をかけて布で拭く程

度だったのだが。

ある日灰は湯を張ったところに浸ければ気持ちが良いんじゃないか  
と思い、湯船を作ったのだ。

檜の木を大人一人入れる位にくりぬき、そして底の木の中に温度を  
上げる簡易符を貼り風呂としたのであった。

「ああ、本当に気持ち良いです。」

灰は本当に良い人ですね。

と映姫は考えふふつと笑っていた。

「さて、映姫には暑さ対策とかいったけど・・・」

オレの前には数百の獣のような妖獣・・・いや化物がいたのだ。

姿は様々、狗の様であったり狐の様であったりと多種多様である。

だが一匹一匹は雑魚妖怪よりも妖力が低いそして言葉ではなく呻き  
声を出しているから頭もよくないのであるう、だが妖怪の一種であ  
るがために力と速度はありえないほどである。それに加えて、数百  
と言う数の暴力である。

灰がもし妖怪だったなら数百と言う数を捕食し自身の力にしただろ  
う。

灰がもし神様だったなら一瞬の内に化物は灰<sup>はい</sup>になっただろう。

灰がもし悪魔だったなら腕の一振で全てを消せたであろう。

だが灰は人間である。

少し特別な力（程度の能力）を持っただけの人間であった。  
故に、死ぬ事は無くとも傷を大量に負うことは必死であった。

「・・・やるか。」

映姫に気取られないようにと愛刀である刀を持ってきていなかったため、通常よりも灰は弱体していた。

「火炎太陽、我滾々燃<sup>かえんのだいよう われこんこんもえよ</sup>」

その咒<sup>まじない</sup>自体に意味は無く、ただの自己暗示であった。

その暗示により灰は自分の力を発揮できるのであった。

と言っても灰の能力の派生な技な分けであるが。

「さあ燃え尽きろ。」

化物の前列にいた数体が体の内から炎を吹き出して燃え尽きた。

化物共は一度怯んだようだが、直ぐに飛びかかってきた。

「一気に飛びかかるなよ・・・なッ！」

何時の間にか手に持っていた炎剣で飛びかかってきた化物を切り裂いた。

切り裂かれたモノは傷跡から発火し燃えていった。

だが、一つを切れば二つから切られ、三つを切れば四つから切られ

の酷く灰に不利な戦いであつた。

「がッ・・・クソが！」

炎剣をもう一つ生み出し双剣とし、さながら乱舞のように振るって行った。

どれほどだろうか、もう既に日は沈みかけている。  
その戦場には灰一人しか立っていないかつた。  
姿は既に満身創痍であり、死人同然であつた。

「・・・やっぱり人じゃ、限界があるのか。」

だが人外に足を落としてはいけない。  
そうセイメイと約束したのだから。

そして灰が最後に思い絵がいたのは、緑の髪をして少し説教くさい少女の顔だつた。

## 代式話 夏、燃える太陽（後書き）

更新は週に一回程度になると思います。

最近は色々なゲームに手を出したり遊戯王始めたりと色々してますからw

まあようは遊んでるんですけどね。

感想有難うございました。

DKさん 自然な感じになってましたか良かったです。

風景描写ですかなるほど。頑張ってみます。

ではまた次回

感想、修正など待ってます

## 代参話 悲しみ（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

## 代参話 悲しみ

日は完全に沈み、村の皆は夕飯でも取っているであろう時間だった。だが村はずれにある小さな家には少女一人しかいなかった。

いつもならば青年と二人談笑しながら夕食をとっていると云うのに。

「で、灰は一体何をしているのでしょうか。」

「まったく仕方ないですね。」

と言いながら、映姫は家を後にした。

一人で夜道を歩くと言うのは危ない。

そう、この幻想が溢れるこの時代は妖や霊なども多く存在するからである。

だが映姫とて神の一柱であった。

襲いかかる理性がない妖を瞬時に倒して進んで行く。

「全く、どれだけ血の気が多いのですか・・・殺さずと言うのも大変なのですよ?」



襲いかかる妖を次々と倒していくと、一箇所だけ酷く沢山の妖が集まっているところがあった。  
その場所は何かを中心にして、燃えたような妖の黒焦げになった死体が数百あった。

「何だというんで・・・す・・・か!？」

映姫は見てしまった、中心にある何かを、それは灰であつた。  
何時も自分に笑いかけてくれた灰であつた。

灰のその姿は食い荒らされていた。  
腹には大きな穴が開いており、右腕は無く、左足も膝から下がない。  
その死体に群がる妖を見た映姫は理性が一瞬にして吹き飛んだ。

「アアアアアアアアアア」

悲鳴のような声を上げながら灰の死体に群がる妖共に襲いかかつて行った。

目からは大量の涙を流しながら、喉からは悲痛な叫びを上げながら。

幾千幾億もの神力で出来た弾幕を打ち出した。

それを掻い潜った妖には映姫自身が手を下して行った。

死と言つ判決を。

「ああ、灰・・・」

灰の死体に縋りながら映姫は涙を流す。

だがその声に答える者はいなかった。

「帰って着て下さいよ灰イイイイイイイイ」

そこは夢のようだった。

天にある灼熱の炎。

一面に広がる灰の山。

鎖のようなもので雁字搦めにされている自分

「・・・」

声が出なかった何かと発音したのにその声が出ていなかった。  
まるで声帯が消えうせてしまったかのように。

「ゴフツ」

口の中に鉄の味が広がった。

それは吐血であった。

それに体が軽かったまるで下半身が無いかのように。

右目は何も見えなかった。

何なんだよ。

と心の中で悪態を突く。

だが現状は何も変わらない。

何故ここにいるのかと。

ここは何故か無限と言う時間が流れているかの用に時間の経過が遅く感じられた。

そんな中、右目の闇の中に文字が浮かんだ。

< 自・・・思に従・・・らば鎖・・・ちる >

所々が掠れて読めない文字であった。

これは何なのかと思考を続ける。

分からない。

分からなかった、何もかもそれよりも何かを考える事自体がもういやになって来ているらしかった。

そして唐突に思い出してしまった。

自分が死んでしまった事を。

それを思い出してから直ぐに、この無限とも呼べる時間の世界は壊れだした。

天にある炎は消え、地にある灰は消えていった。

世界の終わり。

引き伸ばされていた死が直ぐ其処にあった。

オレは死ぬのだと諦めてしまった。

『帰って着て下さいよ、灰イイイイイイイ』

声が響いた。

自分以外いなかった世界に一人の少女の声が響いた。

諦めていたオレは気付いた。

オレが死んだら映姫は一人ぼっちになると。

そんなのは嫌だった。

何で嫌だったのかは分からない。

だけど、今みたに映姫の泣いている声や顔を見たくなかった。

「死にたくない、映姫と生きていたい!!!!!!」

出ないはずの声をだした。  
ただ映姫と生きていたいから。

パシン

と言う音が聞こえた。

ボロボロの体を縛っていた鎖が砕けたのであった。  
体が動く、其の事だけを確認すると走り出した。  
懸命に全力で映姫に会うために。

「オレは絶対にしなねえ！！！！」

直ぐに口に血が溜まったそれを吐き出しもせずに飲み込み。  
走り続けた。

穴が開いた腹から臓物が落ちた。

そんなものは気にせず走った。

ただ懸命に生に縋りつきながら。

灰の大地を走った。

目の前に白い光が見えた。

「オレは！！」

その白い光に飛び込みながら叫んだ。

「生きる！！！！」

代参話 悲しみ（後書き）

最近また風邪引きました。  
咳が酷いです。

ではまた次回

感想など待ってます。

感想は作者の原動力になります

## 代肆話 覚醒（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

## 代肆話 覚醒

私は驚いていた。

目の前にあった灰の死体がどんどん灰<sup>はい</sup>になって行っているのだから。

「か、灰・・・？何ですか、これは！」

直ぐに灰の体は完全に灰<sup>はい</sup>になってしまっていた。

「・・・！？」

灰であった灰<sup>はい</sup>が突然旋風<sup>つむじかぜ</sup>のように回り始めたのだから。そしてその渦は段々と人の体のように集まっていた。

「泣かせて、悪かったな。映姫」

そこには灰が立っていた。

「い、生きているんですか・・・？灰。」

「オレは一回死んださ、でも見つけたんだ。」

そこで一度言葉を区切った灰は、少し間を空けてから続けた。

「オレの能力『死んでも灰になって蘇る程度の能力』をね。」

「では本当に灰なのですね！」

私は泣いていた。

大泣きだったそんな私を抱きしめながら灰はすまなかったと連呼していた。

「本当に死んでしまったと思ったのですよ！」

今映姫は嬉しそうに頬を染めながらオレに説教をしている。

オレもこの説教は少し嬉しかった。

一度死んだのだから、死んだと自覚したしもう駄目だとも思った。けどオレは能力で生き返った。

たぶんこれはオレ本当の気持ちのお陰なんだろう。

「聞いているのですか！」

「ああ、聞いてるって全く。」

でもまだこの気持ちを伝えれない、別にオレが言うのが恥ずかしいとかじゃなくてだ。

色々な問題がある、普通に寿命だ。

オレは死んでも生き返るが年をとらない訳じゃないと思う。どうにかしたい。



それとこっちの方が一番大切だ。

オレがこの村に尽くさねばならない。

そうこれはオレの戒めなのだ、だから破れないし破らない。

「映姫オレは」

「はい、どうしました？灰。」

「この村を護りたい、未来永劫ずっと無限に。」

「・・・」

「ああ、分かってるさ、無理な事くらい、未来永劫なんて無限なんてないって事はな。でも護りたいんだ！オレは村に酷い事をした、だからオレは村を護り続けたいんだッ！」

「・・・そうですか、では止めませんよむしろ手伝わせてください！」

そういった映姫の顔は笑顔だった、その顔を見たオレも自然と笑顔になった。

「ああ、よろしく頼む。」

## 代肆話 覚醒（後書き）

更新多大に遅れてすいませんでした。

もろもろの事情は活動報告に書きましたのでよかったです。

ではまた次回。

感想等お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1905z/>

---

東方真不死鳥伝

2012年1月10日18時54分発行